

谷川遺跡

1999・3

大阪府教育委員会

はしがき

谷川遺跡は富田林市谷川町に所在し、市域の中央を流れる石川の左岸に位置します。府立富田林高等学校改築に伴って平成6年度（1994年度）に発掘調査が行われ、古墳時代の大規模な掘立柱建物や方形周溝墓が検出されました。

今回の調査は平成6年度（1994年度）の調査区の南側を約170m²調査し、前回の調査で検出された大溝の続きが確認されました。この溝は6世紀後半に掘削されたもので、石川の左岸側の開発、大きくは南河内の開発事業の一環で掘削された可能性のあるものです。この時期に掘削された溝は位置をやや西によせて現在は深溝（フコド）と呼ばれる水路になったのではないかと考えられています。この深溝は、今も市域の北側にあり耕地開発に重要な役割を果たしている栗ヶ池につながっています。

このように今回の調査は地域の古代史解明に重要な資料を提供することになると思われます。本府文化財行政に関しましても、地元の方々、関係各位のご理解、ご援助に感謝するとともに、今後ともご協力、ご支援をお願いいたします。

平成11年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 鹿野 一美

例　　言

- 1 本書は府立富田林高等学校改築工事に先立つ谷川遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は大阪府教育委員会施設課の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
- 3 調査は文化財保護課調査第1係技師 井西貴子が担当し、平成10年2月～3月に実施した。整理作業については、文化財保護課資料係技師 地村邦夫と井西が平成10年4月～平成11年3月まで実施した。本書の執筆は井西と福田和浩（現：大阪府文化財センター専門調査員）が担当し文責は文末に示した。
- 4 調査に際しては、北野耕平（神戸商船大学）、中辻亘（富田林市教育委員会）両氏に多大なるご援助、ご教示を得た。
- 5 遺物写真については阿南写真工房に委託した。
- 6 調査における資料は、すべて文化財保護課で保管している。広く活用されたい。

目 次

はしがき	
例言	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査に至る経過	1
第3章 調査の方法	1
第4章 調査結果	1
第1節 基本層序	3
第2節 遺構と遺物	5
第5章まとめ	10

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 地区割り方法	3
第3図 調査区地区割り図	3
第4図 基本層序模式図	3
第5図 遺構全体図	4
第6図 土坑1・2、小穴3・4断面図	5
第7図 溝5断面図	6
第8図 溝5出土遺物	6
第9図 溝6、7断面図	6
第10図 溝7出土遺物	6
第11図 溝8断面図、出土遺物(1)	7
第12図 溝8出土遺物(2)	8
第13図 溝9断面図	8
第14図 溝9出土遺物	8
第15図 溝10断面図	9
第16図 溝10出土遺物	9
第17図 溝11断面図、出土遺物	9

図 版 目 次

図版1 調査区全景	
図版2 遺構写真	
図版3 遺物写真	

第1章 遺跡の位置と環境（第1図）

谷川遺跡は富田林市谷川町に所在し、石川の左岸側標高68mの中位段丘上に立地している。本遺跡は平成4年に富田林高等学校改築に伴って実施した試掘調査によって新規発見された遺跡である。遺跡の範囲は東西200m、南北150mと推定されている。

周辺の遺跡を見てみると、本遺跡の南西側に甲田遺跡が存在する。甲田遺跡は石川左岸で最も低い段丘上にあり本格的な発掘調査は実施されていないが、古墳時代後期の集落跡が存在すると推定されている。北東方向100m程には富田林寺内町遺跡が存在する。また約1.5km北側に中野遺跡が存在する。中野遺跡は古墳時代中期から集落が展開され、奈良時代には掘方1mもの掘立柱穴が検出されていることもあり、石川郡の郡衙ではないかと推測されている。またこの遺跡は西側に存在する南河内最古の古代寺院である新堂庵寺との関係が指摘されている。

このように石川の左岸側は古墳時代後期から大規模に開発され集落が形成されるようである。本遺跡もそれらの集落との関係を無視できないものであろう。また、本遺跡は東高野街道に面している。

『谷川遺跡発掘調査概要・I』—富田林市谷川町所在— 大阪府教育委員会 1995年

第2章 調査に至る経過

今回の調査は、平成6年度の調査中に旧校舎が存在した場所が対象となった。しかし、旧校舎と体育館が建設されている所は基礎が深く、遺構面が壊されている部分が多かったので旧校舎と体育館の間の空間地で調査を実施することとした。しかし実際調査を実施してみるとかなりの面積で搅乱が存在した。調査位置は平成6年度調査の3区の南側である。

第3章 調査の方法（第2・3図）

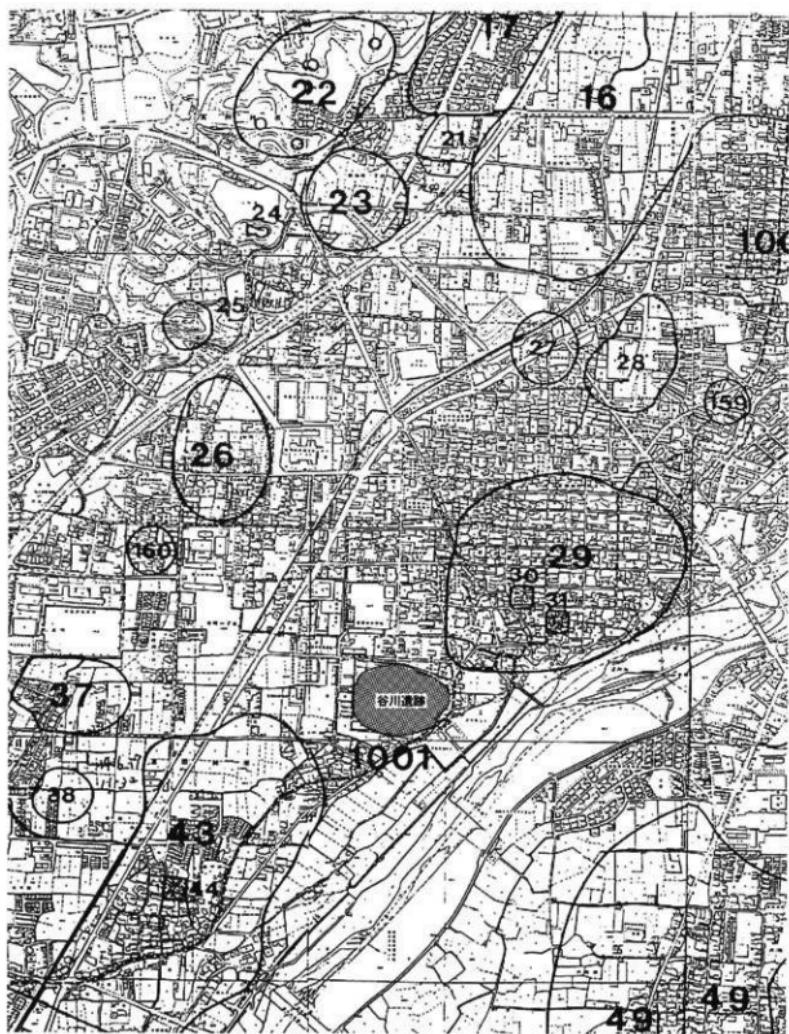
調査における遺物取り上げ等の基本単位として、地区割りを実施した。

地区割りは国土座標VI系に基づき、1万分の1の地形図を使用した縦6km、横8kmの第1区画、2500分の1地形図を使用した縦1.5km、横2kmの第II区画、第II区画内を100m単位で区画した第III区画、第III区画内を10m単位で区画した第IV区画、第IV区画内を5m単位で4分割した第V区画の5つの区画を用いて位置を表示する。このうち第I～V区画については必ず記録するものとし、遺構の位置や遺物の取り上げにあたっては必要に応じて第V区画も用いて更に詳細な位置を表示するようしている。なおこの地区割りは（財）大阪文化財センター（現：（財）大阪府文化財調査研究センター）の地区割りに依拠している。

調査は旧耕土、床土について機械による掘削を、包含層以下を人力掘削した。（井西貴子）

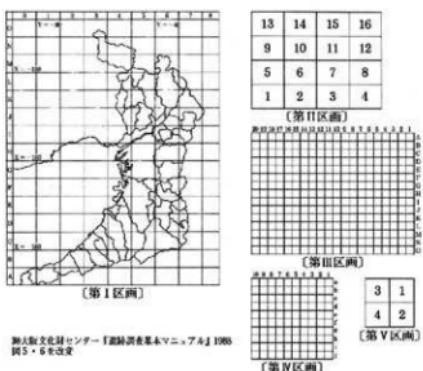
第4章 調査結果（第4図）

谷川遺跡は、1994年度に調査が実施され、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の大規模な堀立柱建物・溝などが検出されている。⁽¹⁾今回の97年度の調査区は94年度の南西部にあたり、土坑・小穴・溝等が検出された。遺物に関する詳細は文末に観察表としてまとめた。

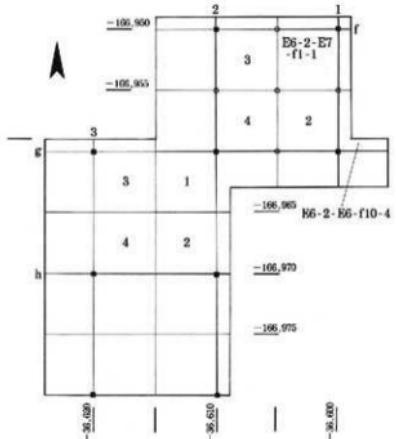


16 中野遺跡	29 富田寺内町遺跡	49 西板持遺跡
17 新堂廻寺	43 甲田遺跡	26 毛人谷遺跡
23 新堂南遺跡	1001 東高野街道	25 毛人谷跡

第1図 周辺遺跡分布図



第2図 地区割り方法



第3図 調査区地区割り図

第1節 基本層序

調査区が狭小のため、全域にわたって同様の層序を示し、現校舎建設時の盛土である第0層を除き、大きく5層に分けられる。第1層 10YR5/2灰黄褐色と2.5Y4/4オリーブ褐色砂混じり土

層厚は6~10cmを測る。近世の耕作土と考えられるが、層内に酸化鉄の沈殿層があり、細分できる可能性があるが境界は明瞭ではない。

第2層 10YR5/6黄褐色砂混じり土

第1層の耕作土に伴う床土と考えられる。層厚は4~10cmを測る。

第3層 2.5Y5/2暗灰黃褐色砂混じり土

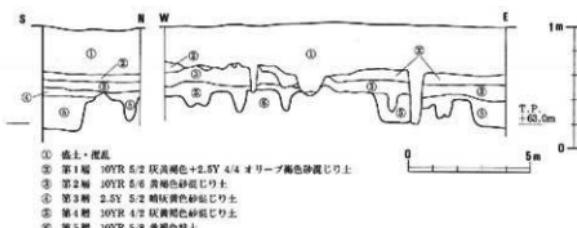
層厚は約3cmで、この層は調査区全域ではなく、E6—2—E7—f2—2区より南西で確認される。遺物が出土しなかったため時期は不明だが、第4層堆積以降の耕作土と考えられる。

第4層 10YR4/2灰黄褐色砂混じり土

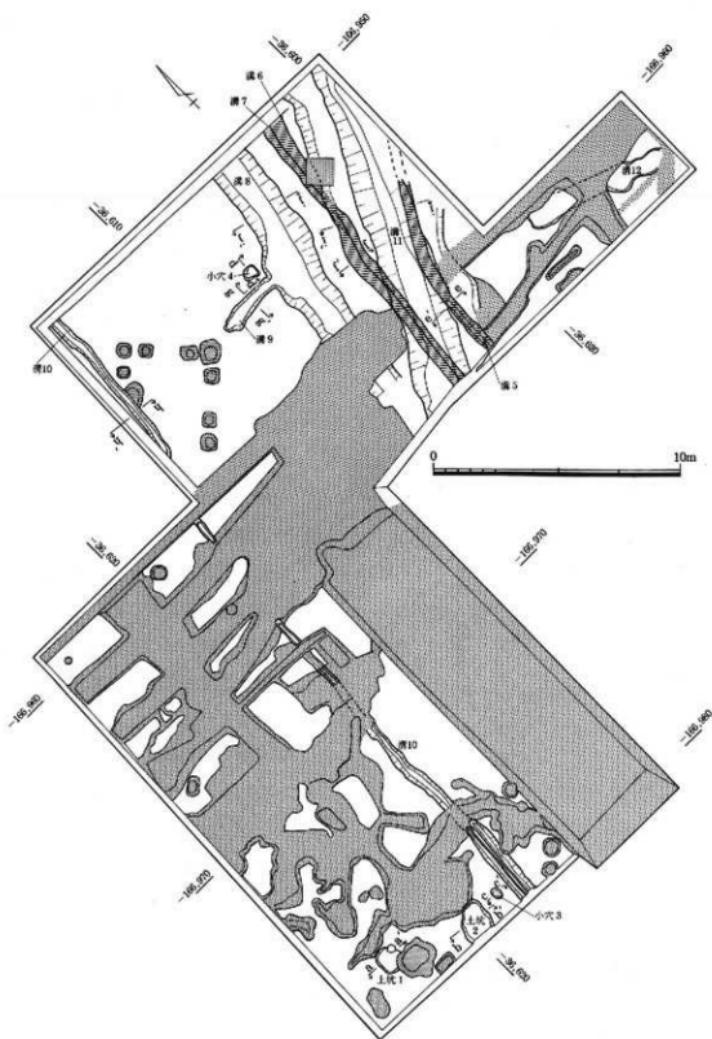
中世の遺物包含層である。13~14cの土師皿等が出土した。

第5層 10YR5/8黄褐色粘土

いわゆる地山層である。遺構はこの層の上面で検出された。



第4図 基本層序模式図



第5図 遺構全体図

第2節 遺構と遺物（第5図）

遺構は、第5層上面で検出し、遺構面は1面確認した。検出した遺構は、土坑2基、小穴2基、溝8条である。以下、それぞれの遺構と出土遺物について説明する。

土坑1（第6図）

調査区南西隅、E6—2—E7—h3—2区で検出した土坑である。南東部は擾乱坑に切られるが、平面形は隅丸方形と推定される。現存長南北1.1m、東西1.05m、深さ0.06mを測る。断面形は底面に凹凸があるがほぼ逆台形を呈し、埋土は1層である。遺物の出土がなかったので、時期は不明である。

土坑2（第6図）

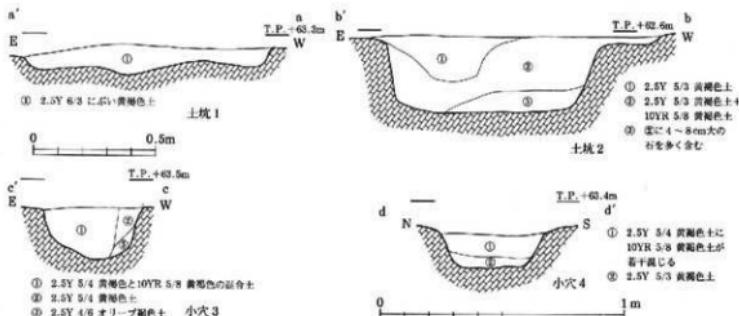
調査区南西隅、E6—2—E7—h2—4～E6—2—E7—h3—2区で検出した土坑である。平面形は不定形で南北1.6m以上、東西1.28m、深さ0.31mを測る。断面形は逆台形を呈し、埋土は3層である。遺物の出土がなかったので、時期は不明である。

小穴3（第6図）

調査区南西隅、E6—2—E7—h2—4区で検出した小穴である。平面は円形で、直径0.4mを測り、断面は不整な半円形で深さは0.21mを測る。埋土は3層である。遺物は出土しておらず、時期などは不明である。

小穴4（第6図）

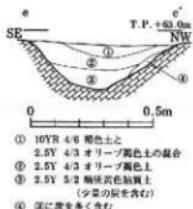
溝8の西側、E6—2—E7—f1—3区で検出した小穴である。平面は方形で、南北0.43m、東西0.65mを測り、断面は逆台形で深さ0.18mを測る。埋土は2層である。遺物は出土しておらず、時期等は不明である。



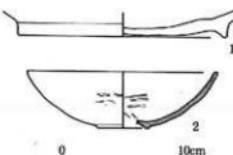
第6図 土坑1・2、小穴3・4断面図

溝5（第7・8図）

調査区東部、E6—2—E7—f1—1～E6—2—E7—g1—1区にかけて検出した溝である。溝11の①にぶい黄褐色土を除去した後確認された。調査区北東側からN—30°—Eの主軸で直線的に4.5m延びたあと、搅乱で分断されるが主軸を南北に変え5.5m直線的に延びる。検出長は10



第7図 溝5断面図

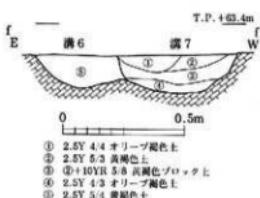


第8図 溝5出土遺物

m、幅は0.61mを測り、断面形はU字形で、深さ0.18mを測る。埋土は3層に分層される。遺物は、土師器鉢と瓦器碗等が出土した。これらは、前者が10c代、後者が13c前葉頃の時期と考えられる。これから、この溝は13c前葉までは機能していたと考えられる。

溝6（第9図）

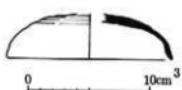
E6—2—E7—f1—1～E6—2—E7—g1—1区にかけて南北に検出された溝である。調査区北側から5.5mはN—10°—Eで直線的に延び、E6—2—E7—f1—2区で主軸をN—5°—Eに変え、南に8.5m直線的に延びる。検出長は14m、幅0.45mを測り、断面形は浅いU字形で、深さは約0.1mを測る。埋土は黄褐色土である。遺物は出土しておらず時期は不明であるが、溝6は溝7と重複し、溝7に切られていることから、前後関係があるものの、時期は不明である。また、溝7・8と共に溝6は、溝5・11が埋没した後に掘削されている。



第9図 溝6、7断面図

溝7（第9、10図）

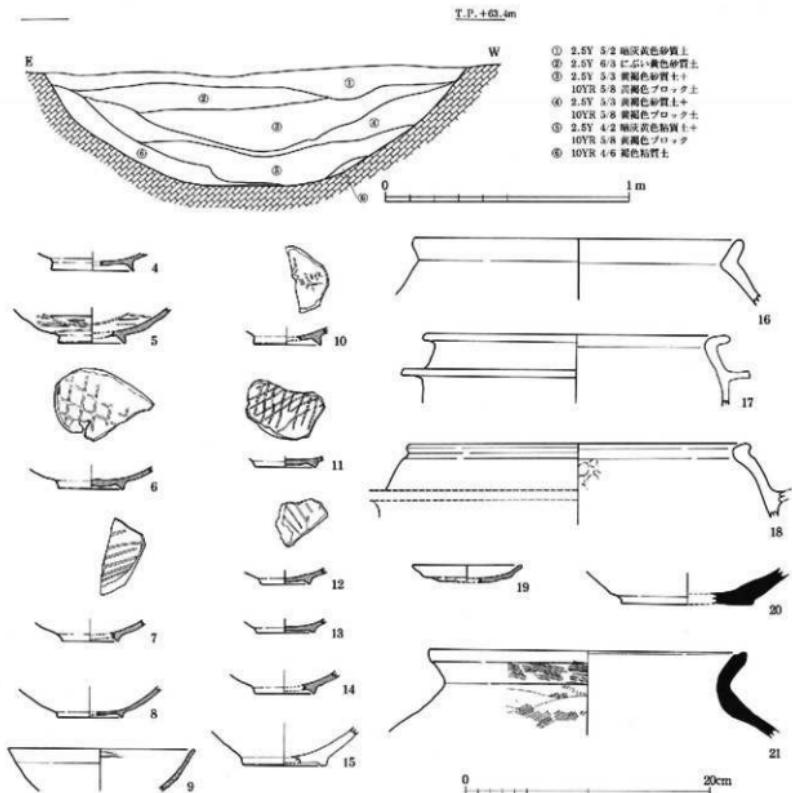
調査区北部、E6—2—E7—f1—1～E6—2—E7—g1—1区にかけて、溝6の西側に平行して検出された溝である。調査区北側からN—10°—Eの主軸で6m直線的に延び、E6—2—E7—f1—2区で主軸をN—5°—Wに変えて、南に8.5m直線的に延びる。溝6と同様に主軸の屈折部がある。全長14.5m、幅は0.5mを測り、断面形は浅いU字形で、深さは0.15mを測る。埋土は黄褐色土を基調とした4層に細分でき、須恵器の杯蓋等が出土している。時期は古墳時代後期（須恵器型式でTK43～209）と考えられる。⁽²⁾しかし溝7は、溝11を切っており、これらの遺物は混入品と考えられる。



第10図 溝7出土遺物

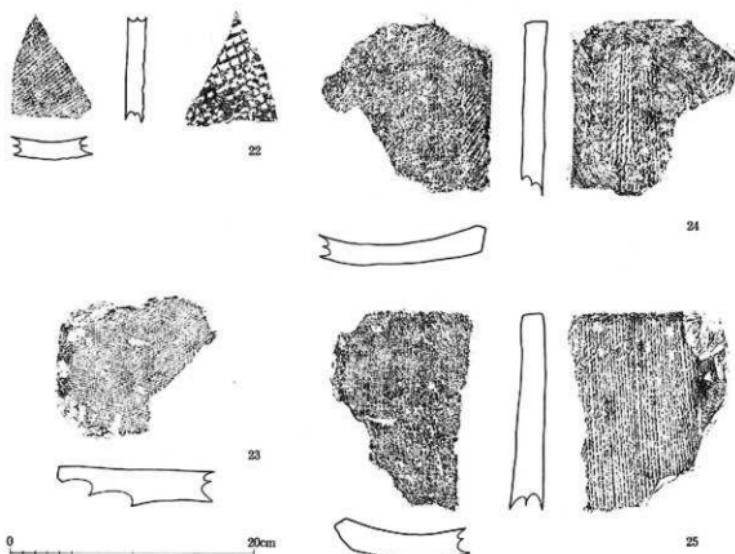
溝8（第11、12図）

調査区北部、E6-2-E7-f1-1～g1-3区にかけて溝6の西側に平行して検出された溝である。調査区北側からN-10°-Eで5m延び、E6-2-E7-f1-4区で主軸を南北に変えて南に9m延びる。検出長は14m、幅は1.76mを測り、断面形は浅い梯形を呈し、深さは0.48mを測る。埋土は6層に細別できるが2層に大別できる。上層は1～4層で溝の埋没時の堆積と考えられ、下層は、5、6層で、溝が機能していた頃の堆積と考えられる。遺物は、主に上層から出土し、瓦器（4～14）、白磁（15）、須恵質土器（20、21）、土師質土器（16～18）、瓦器小皿（19）、瓦片（22～25）等が出土している。これらは、（4、5）が11c末～12c初め、（6～8、11、12）が12c中頃～後半、（13・14）が13c前葉、（15）が12c代、（16）が平安時代、（17）が13c前後、（18）が中世、（19）が13c前後頃の時期と考えられる。瓦は、（23）が軒平瓦の瓦当部が剝がれたものであるが、他はすべて平瓦で（22、23）は白鳳時代、（24、25）は



第11図 溝8断面図、出土遺物（1）

奈良時代のものである。出土した遺物の時期幅が広いが、13c 前葉の瓦器碗が最も新しい段階のものであり、溝の埋没時期は13c代と考えられる。



第12図 溝8出土遺物(2)

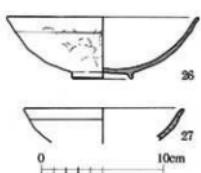
溝9(第13、14図)



第13図 溝9断面図

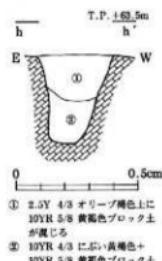
E6—2—E7—f 1—3区で溝8から西方向へ突き出すかたちで検出された溝である。主軸は東西で、長さ2.8m、幅0.52mを測り、断面形は逆台形で、深さ0.28mを測る。埋土は4層に細分できる。遺物は、瓦器碗(26・27)が出土した。これらは、(26)が12c中頃～後半、(27)が13～14cの時期と考えられる。溝8との明確な切り合ひ関係が認められなかったため、溝8から分流する溝と考えられる。遺物も同様の時期を示す。

第14図 溝9出土遺物



調査区中央部E6—2—E7—f 2—1～E6—2—E7—h 2—4区で南北に長く検出された溝である。E6—2—E7—f 2—1～E6—2—E7—f 2—2区にかけてはN—5°—Eの主軸で7.5m延び、調査区外に抜け、E6—2—E7—f 2—4区で主軸を南北に変え途中、搅乱により分断されるが、南に22m直線的に延びる。検出長は31.7

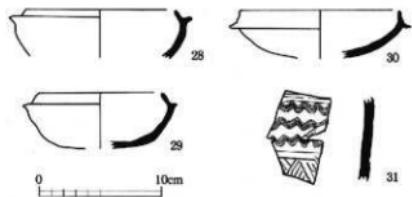
m、幅0.3mあり、断面形はU字形を呈し、深さ0.36mを測る。埋土は2層に分層できるが、いずれも、埋没時の堆積と考えられる。また、調査区の南西部、E6—2—E7—h2—4区で、溝は2条に分かれる。断面形はどちらもU字形を呈すが、埋土や断面の形状から東側の溝が北側に続くと考えられる。遺物は須恵器(28~31)が出土している。これらは、おおよそ6c後半頃の時期と考えられる。出土地点が鍾まっており一括して投棄されたものと思われる。溝7の出土須恵器の例もあり、これが溝の埋没時期を示すかどうかは不明である。



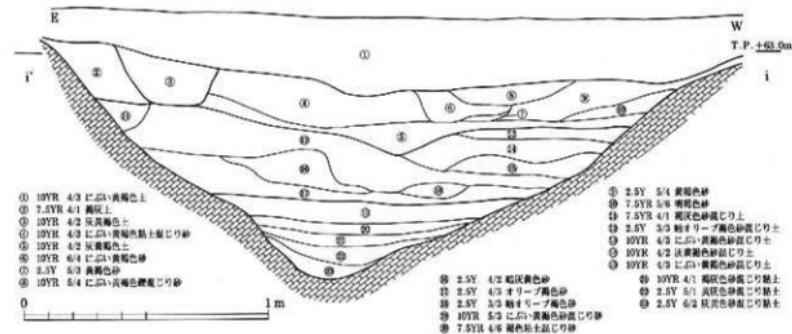
第15図 溝10断面図

溝11(第17図)

調査区北東部、E6—2—E7—f1—1～E6—2—E7—g1—1区で検出された溝である。N—27°—Eの主軸で直線的に15mにわたって検出され、幅は約5mを測る。断面形はU字形を呈し、底はさらに1段深くなる。深さは約1mを測る。溝5～7と重複関係にある。埋土は23層に細分で



第16図 溝10出土遺物



第17図 溝11断面図、出土遺物

きるが、4層に大分できる。下層（19～23）は砂を主体とする層で、洪水など土砂の急激な堆積を示すと考えられる。中層は、地山ブロックを含み、人工的に埋められたものと考えられ、中層が埋没した後溝5が掘削されている。上層は最終段階の埋没土である。

遺物は、上層・中層より出土し、須恵器（32～35）と土師器（36、37）等が出土している。

これらは、（32）が8c前半、（33～35）が8c代、（36）が9～10c代の時期と考えられる。8c代のものが中心であるが、時期の下る遺物としては10c代の土師器がある。埋没は10c代と考えられる。また1994年度調査からは、古墳時代後期の遺物が大量に出土している。今回遺物がなかった下層以下からのものとも考えられる。1994年度調査から考えると、少なくとも溝11については古墳時代後期に機能していた可能性は推測できる。

溝12

調査区東部、E6—2—E6—g 10—1～E6—2—E6—g 10—2区にかけて検出した溝である。主軸はN—70°—Wで、搅乱で分断されるが、長さ7.3m、幅1.2mを測る、一つの溝であると考えられる。遺物が出土しておらず、時期は不明だが、1994年度の調査で弥生時代の方形周溝墓が検出されており、形状などから同じ性格のものとも考えられる。（井西、福田和浩）

第5章 まとめ

谷川遺跡の調査は94年度に次いで2回目となり、前回調査で検出された溝の延長が確認された。今回の調査では、前回の調査でそれぞれの溝の前後関係が不明であったところを明確にした。各遺構の様相をまとめると、

土坑1、2、小穴3、4・・・・時期性格等不明

溝5・・・・溝11埋没後掘削、13c前葉埋没

溝6・・・・溝5、11埋没後掘削、時期不明

溝7・・・・溝5、6、11埋没後掘削、時期不明

溝8・・・・溝5、11埋没後掘削、13c前葉埋没

溝9・・・・溝8に付隨する

溝10・・・・溝11に対応する可能性（古墳時代後期）と条里制導入以後の可能性

溝11・・・・古墳時代後期には機能、10c代までには埋没

溝12・・・・弥生時代の方形周溝墓の溝か

溝の関係をまとめると 溝11→5→6→7→8または、溝11→5→8→6→7となる。溝6・7と8に関しては、切り合い関係、遺物的に前後関係がいえないため、2通りの可能性がある。しかし、ここで重要なのは、溝11・5と溝6～8の掘削プランが違うことである。前者は、今回調査区の北側から西側に向かってアールを描いている。それに対して、後者は南北に掘削されている。溝5の埋没年代の下限は遺物により13c前葉である。そこから考えるならば、南北に主軸が

移るのは、それ以降ということになる。しかし、溝8の埋没年代の下限も同じ頃であるため、この溝が機能していたのは短期間と考えられる。他の溝に関してであるが、様相が不明なのが溝10である。遺物的には古墳時代後期のものと考えられるが、混入品の可能性もあり、即決できない。プラン的に南北に沿ったものとも考えられ、溝8などと同様のものといえるが、94年度調査では弥生土器の破片のみ出土しており、またプランも溝11の延長（94年度調査の大溝1）のアール部分に対応して曲がっているように見られる。従って、時期を明確にすることはできない。

様々な時代の溝が検出されたわけであるが、これらの性格について、どのようなことがいえるのであろうか。条里地割を中心に、溝の性格を分析し、この地域の景観を復原したいと思う。

今回検出した溝8の主軸がおおよそ南北であることは前述した。これが、この地域の条理地割に対応する坪境であることは、94年度調査でも指摘されている。⁽¹⁾つまり、甲田地区周辺に見られる条理地割に沿っており、富田林高校を南北に縦断するこの坪境は、甲田地区に展開する「里」の東限をも示している。⁽⁴⁾そして、この条理地割は、溝8出土遺物より少なくとも13c代にはこの地域に施行されていたと考えられる。また、溝10を条理遺構と考えるならば、溝8から約11mの距離があり、長地型の区割りの可能性もある。また94年度調査の溝19も溝10から約11mの距離があり同じ地割に沿ったものと考えられる。逆に、94年度調査の溝18は、溝8を単位とした地割に沿ってこないが、溝6・7（前回調査の溝2）から約20mの距離があり、溝6・7を坪境とする、半折型の地割に対応する可能性がある。また、溝9も条理遺構の可能性があり、溝6・7も同様の位置で主軸の屈折がある。従って、何らかの区割りが存在したと思われるが、南側に関しては未調査だが、北側に関して、同様の屈折部や東西方向の溝が確認されておらず、また、現存する条理地割にも沿ってこないため、溝9が条理区割りを示すものかどうかは不明である。

ところで、富田林寺内町がある地域は、条理地割を無視して設定された集落であり、現在の状況から条理地割を復元することは出来ない。従って、発掘調査によってのみそれが可能である。そこで、溝8以東の状況であるが、古墳時代の掘立柱建物などは検出されたが、条理に伴う遺構は明確でない。寺内町が位置する南北に連なる段丘面は、北方にある粟ヶ池に向かう浅い谷によって切られており、西側と比べて1段高くなっている。従って、水利的にも開拓が困難であり、石川郡の他の地域が整然と条理制が施行されても、この地域だけ施行されなかった可能性が指摘されている。⁽⁴⁾以上のことから、溝8以東つまり寺内町周辺は、視覚的に判別できる条理制は施行されなかつた可能性が高いといえる。（福田和浩）

(1) 西口陽一 1995『谷川遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会

(2) 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

(3) 瓦器の時期については以下を参考にした。

中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

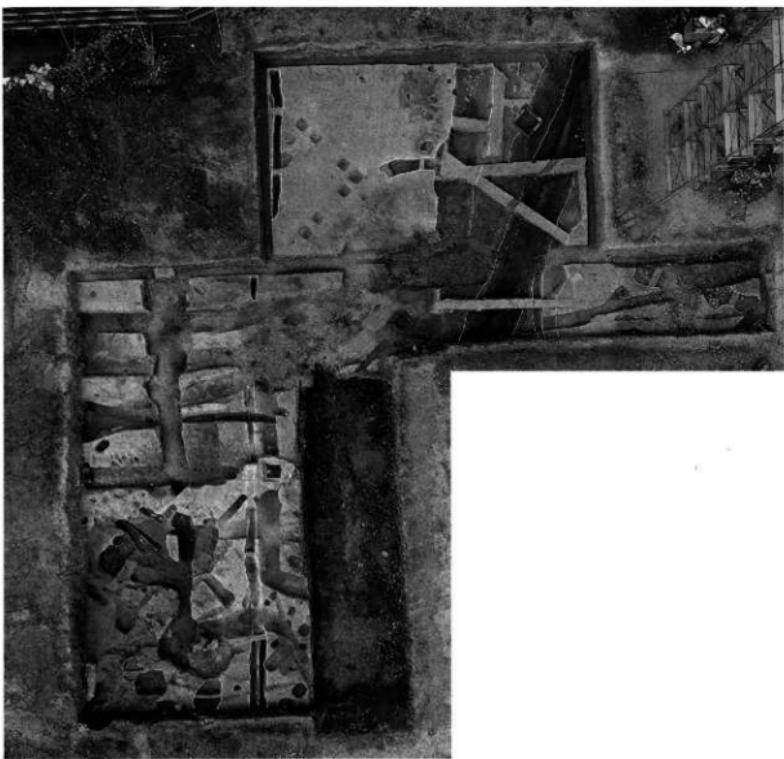
(4) 富田林周辺の条理地割・地形については、以下の文献を参考にした。

井上 薫他 『富田林市史 第1巻 古代編』 1985

遺物観察表

遺物番号	種類	器種	法量(cm) [] は復元値			残存率	制作技法上の特徴	出土遺構
			口径	器高	底・高台径			
1	土師器	鉢		残2.0	[16.0]	底部35%	調整は廃減のため不明。はり付け高台	満5
2	瓦器	椀	[15.4]	4.6	[4.2]	15%	口縁ヨコナデ・体部外面指押さえ痕	満5
3	須恵器	杯蓋	[13.4]	残3.7		口縁部17%	天井部へラケズリ・その他回転ヨコナデ	満7
4	瓦器	椀		残1.4	[6.7]	高台部45%	見込み部平行線状暗文	満8
5	瓦器	椀			[5.4]	高台部35%	内面ヘラミガキ・外面指押さえ痕	満8
6	瓦器	椀			5.2	高台部35%	見込み部格子状暗文	満8
7	瓦器	椀			[4.6]	高台部18%	見込み部平行線暗文・外面指押さえ後ナデ	満8
8	瓦器	椀			[5.2]	高台部30%	内面ヘラミガキ・外面指押さえ後ナデ調整	満8
9	瓦器	椀	[15.0]			口縁部12%	内面ヘラミガキ・外面ヨコナデ	満8
10	瓦器	椀			[5.4]	高台部17%	見込み部暗文	満8
11	瓦器	椀		残0.9	4.8	底部のみ	見込み部格子状暗文	満8
12	瓦器	椀			[4.0]	高台部18%	見込み部格子状暗文・外面指押さえ痕	満8
13	瓦器	椀		残1.2	[4.6]	底部40%	廃減のため不明	満8
14	瓦器	椀		残1.6	[4.8]	高台部25%	内面ヘラミガキ・外面指押さえ痕	満8
15	白磁	椀		残3.2	[6.8]	底部30%	底部外面回転ナデ	満8
16	土師質	甕	[27]	残2.4		口縁部40%	ナデ	満8
17	土師質	羽釜	[26.6]	残5.5		口縁部10%	廃減のため不明	満8
18	土師質	羽釜	[13.6]	残6.1		口縁部8%	内外面とも指押さえ後ナデ調整	満8
19	瓦器	小皿	[9]	残1.4		口縁60%	底部外面指押さえ	満8
20	須恵器	壺		残3.0	10.8	底部30%	底部糸切り痕後指押さえ・その他回転ナデ	満8
21	須恵器	壺	[25.8]	残7.0		口縁部13%	内面回転ナデ・外面タタキ後回転ナデ	満8
22	瓦	平瓦				小片	凸面格子目タタキ	満8
23	瓦	軒平瓦				小片	凸面格子目タタキ	満8
24	瓦	平瓦				小片	凸面繩目タタキ	満8
25	瓦	平瓦				小片	凸面繩目タタキ	満8
26	瓦器	椀	[15.6]	残5.1	5	高台部90%	内面ヘラミガキ・外面指押さえ後ナデ調整	満9
27	瓦器	椀	[13.2]	残2.8		口縁少々	内面ヘラミガキ・外面指押さえ後ナデ調整	満9
28	須恵器	杯身	[12.2]	残3.9		口縁部15%	内外面とも回転ナデ	満10
29	須恵器	杯身	[10.0]			30%	内外面とも回転ナデ	満10
30	須恵器	杯身	[13.0]			口縁部40%	内外面とも回転ナデ	満10
31	須恵器	器台?				小片		満10
32	須恵器	杯身	[14.4]	残4.35	[10.1]		内外面とも回転ナデ	満11
33	須恵器	杯身		残2.1	[11.8]	高台部24%	内外面とも回転ナデ	満11
34	須恵器	壺		残3.2	[11.2]	高台部13%	内外面とも回転ナデ	満11
35	須恵器	杯身		残1.8	[10.6]	底部20%	底部内面不定方向ナデ	満11
36	土師器	甕	[14.2]	残2.2		口縁部80%	内外面ともナデ	満11
37	土師器	壺	[15.0]			口縁部20%	口縁ヨコナデ	満11

図 版

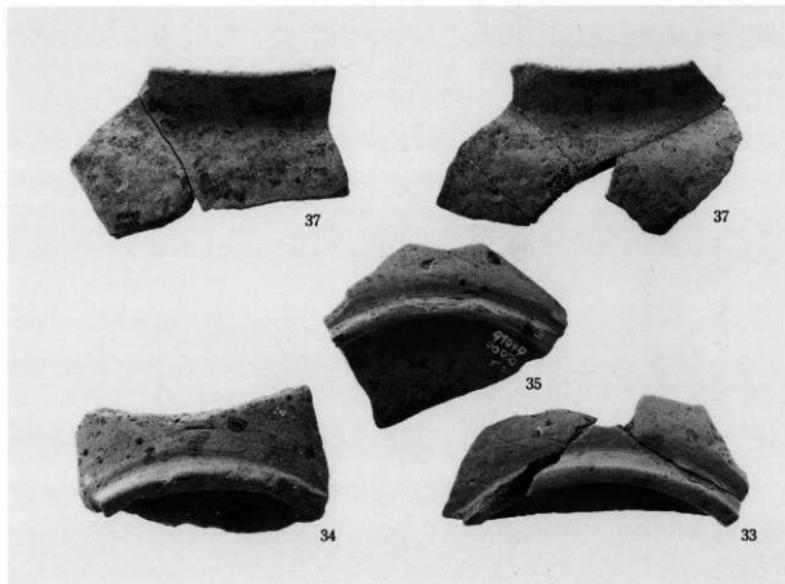
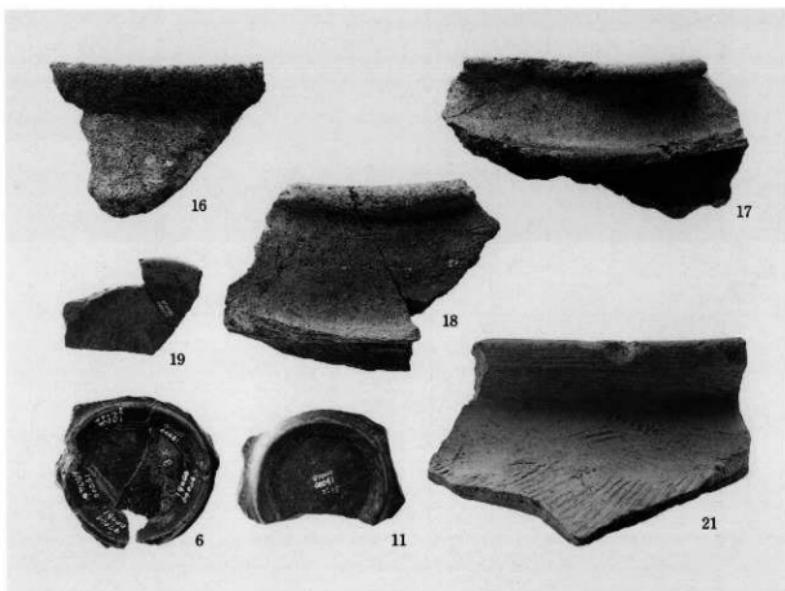




1 溝8、9、11（東から）



2 溝川断面（北から）



報 告 書 抄 錄

ふりがな	たにがわいせき
書名	谷川遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	1998-3
編著者名	井西貴子・福田和浩
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351
発行年月日	1999年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たにがわいせき 谷川遺跡	とんだばやしし 富田林市 たにがわいせき 谷川町	27214		34 29 40	135 36 40	1997年 2月～3月	200	府立富田林 高等学校建 て替え工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
谷川遺跡	集落	弥生時代 古墳時代～平安時代 中世	方形周溝墓 溝 溝	土師器・須 恵器・瓦器・ 陶磁器	

